繪本故事談 二

E
18
2

逍遥文庫
文庫6
25
2

繪本故事談巻之二目録

老子
蘓子瞻
華山五仙
武内宿禰
伏柴加賀
石花咲
司馬君實
黄安仙人
謝靈運
孫子邈
仲犬
待宵侍従
照病鏡
祖瑩

匡衡　淳于髡
魯般　養由
猫五徳　道蘊
紙鳶　昇月宮
翟璜任坐　公孫穆
朱雲　詰汾
七福神

絵本故事談巻之二

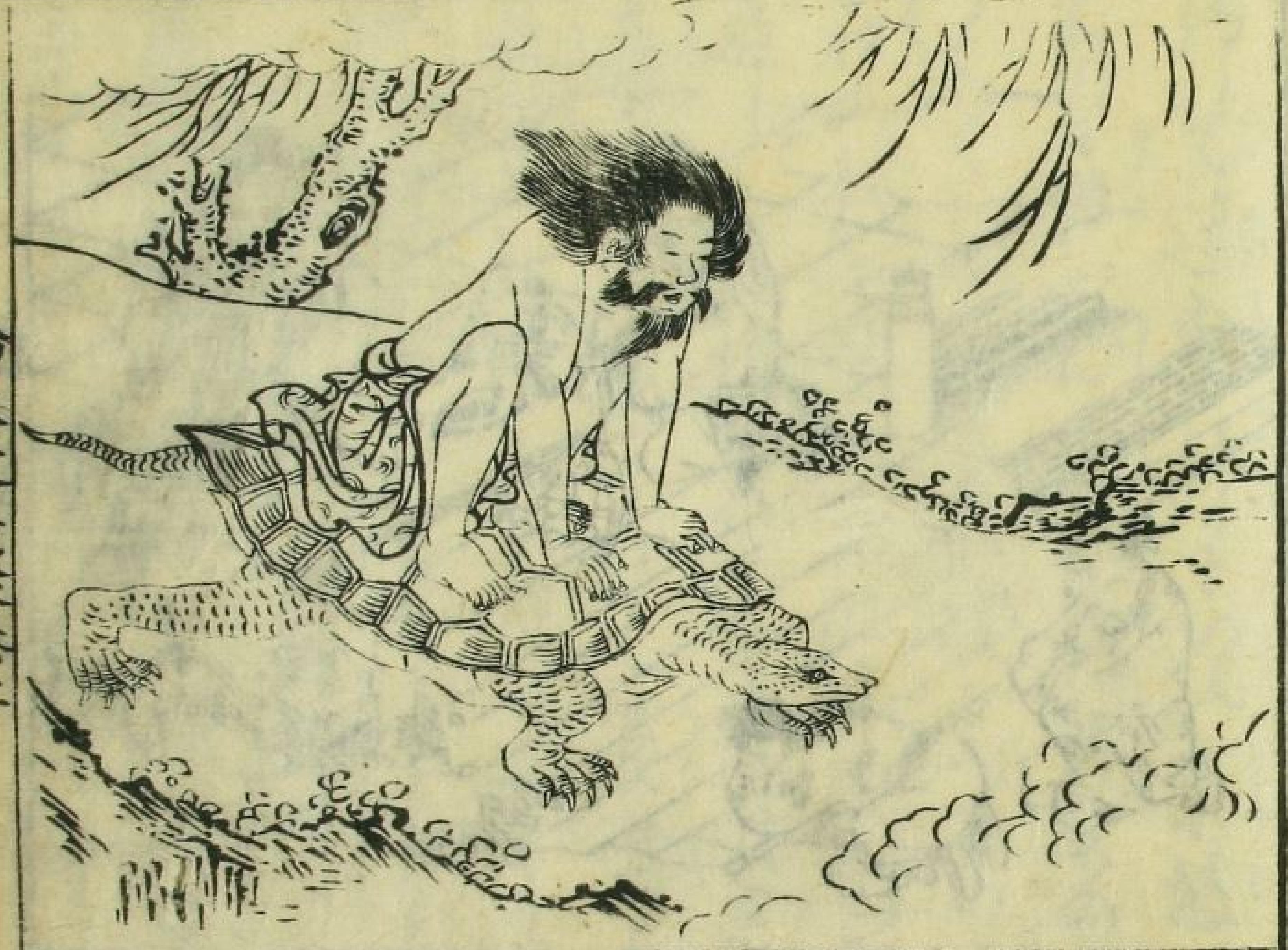
老子　列仙傳

老子ハ太上老君なり混沌の圖ヲ曰神三皇の時身を化して現て萬法天師となり中三皇の時盤古先生となり伏羲の時鬱華子となり女媧氏の時鬱密子となり神農の時大成子となり軒轅乃時廣成子となり少皞乃時隨應子となり顓帝の時赤精子となり帝嚳の時祿圖子となり堯乃時務成子となり舜の時尹壽子となり禹乃時真行子となり湯の時錫則子となる斯のごとく化して世として出ざるはなしと然れどもいまだ誕生の迹わらぞ商の陽甲の時に及て神

文庫 6
25
2

をふち気と化して胎を玄妙玉女に寄る事八十一年武丁の庚辰二月十五日卯の時に至て楚の苦縣瀨郷曲の仁里において降誕す母の左の腋よりて生る李樹の下にうまれて樹を指ていふく此吾か姓なりと生れし時より白首にして黄白色也額に参午の達理ありて日月の角懸る長耳綬目鼻は純骨の雙柱なり耳に三漏門あり美鬚廣額疎齒方口なり足に三五を蹈手に十文を把る姓は李名は耳字は伯陽諡て老子といふ又老聃といふ下畧 後世これを仙術の祖神仙の冠とするものなり

老子



黄安仙人　列仙傳

黄安ハ衣ともきさして
一ツの神亀大さ三
尺なるに乗て遊へり
時の人亀ハ在するか
幾年ぞと問ば黄安答て
此亀三千年に一たび
頭をいだすとなり我是を得て
以来五たび頭を出すを
見けりとなり此亀を
負て趨けるとかや

東坡　春渚紀聞

東坡銭塘といふ所にありし時、浙の者訴ふ。綾絹の代二万銭を負て償はずとや。是負たる者乃いはく、某が産業扇を製し作る。此ほど父死して喪をつとめ、また此頃雨ふりつゞき、天寒く扇かつて售得ずして迷惑仕ると云。東坡つくづくと見て、汝が制する所の扇を持来れとて、負たる者此扇二十扇を持来る。東坡之をとり行書草書枯木竹石の類を画き、是を売て右の負めを償へとて渡されければ、彼者扇を抱て涙を流し喜び門を出ければ、買者争ひ人とおもひ千銭文を以て一扇を求る程なりて負めを償て其訴おさまり有けるとなん

謝霊運　世説新語補

晋の謝霊運は車騎将軍玄といふ者の孫なり。常に曲なる笠を好て歩行き、或時孔隠士と

いふ者ありわひてかんがらハ
物の直なるを好老あつた
曲れる笠を見てハいつん
ぎやいひけれハ謝霊
運がいわく頭を恐るゝか
老ハ笠ひをわするしあしと
わくは頭の此笠を見る
也いは笠の曲れる頭
を見て頭心のまよふれる
とかをくせんこれるぞ
ありくとる

華山五仙 列仙傳

衛叔卿といふ老仙術を得て華山に入れり其子度世といへるが勅命によりて父叔卿を尋て華山絶巖の下より望みれば叔卿數人とゝもに碁を圍居たり度世父に命ありていはく同博者を誰ぞや叔卿がいはく洪崖先生巣父許由王子晋なり汝ハ爰に来しと語りへは家なる柱の下に仙方を埋おけり帰りて是をほれといひて吒て去しかバ度世帰りて此薬を掘て服して又仙人となれり

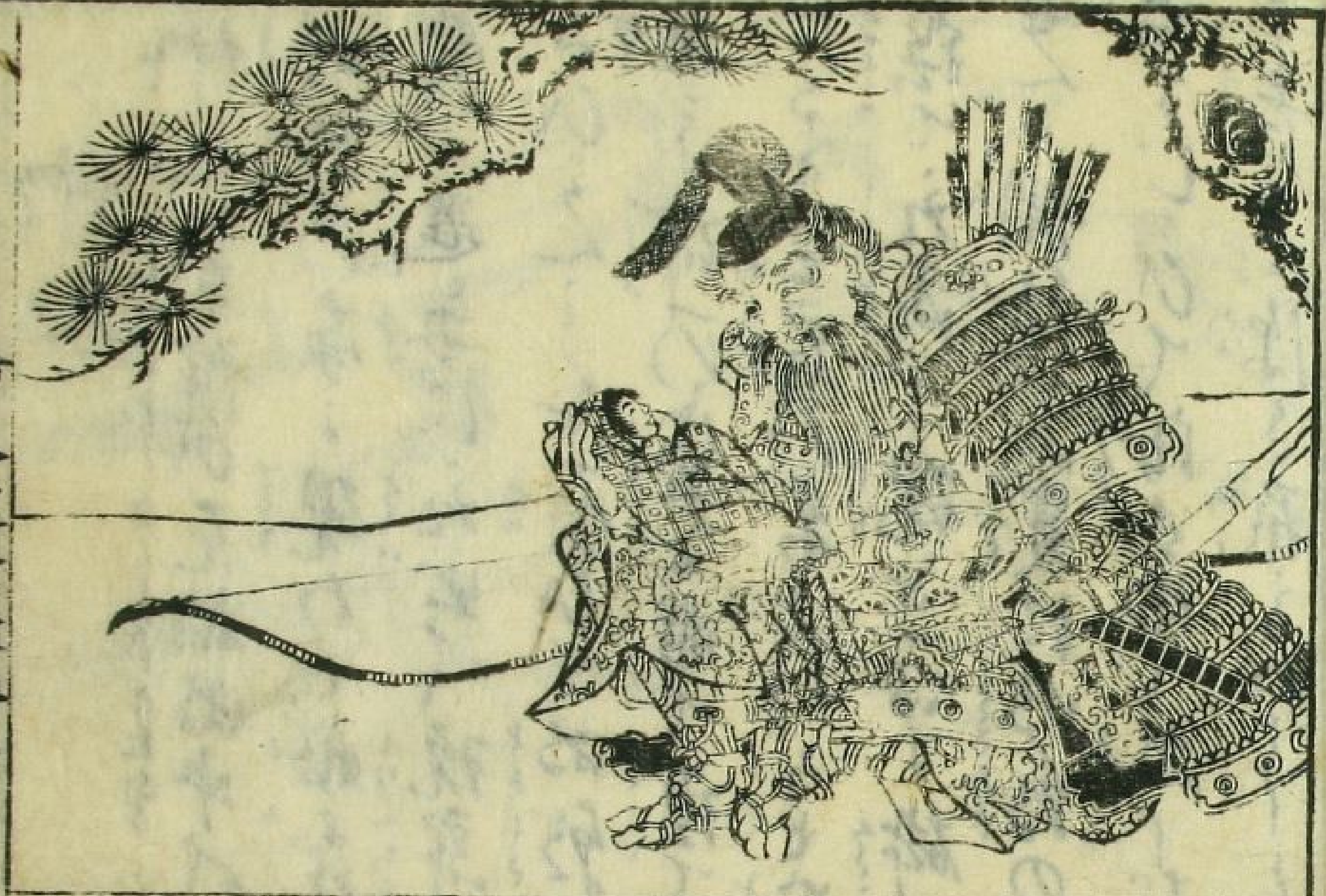
孫子邈 同上

孫子邈ハ周の宣帝此時の名醫なり國人呉夜をつくして子邈に要るに治を得といふことなし邈ハ脱て仙となる後玄宗皇帝夢に子邈雄黄を乞とみて即十斤をそのえ使をつかわして峨眉山へ

送る使山の中に迷ひて子遜忽然として見へ大蟻
石を指ていはく業を此に留へし石上に表わり識し
て皇帝に謝せよといふ使石上をみれば百餘字
の表あり即これを手寫せて写すに随て滅て石上
に字なし終後白氣湧起て子遜もまたさりぬ

武内宿禰

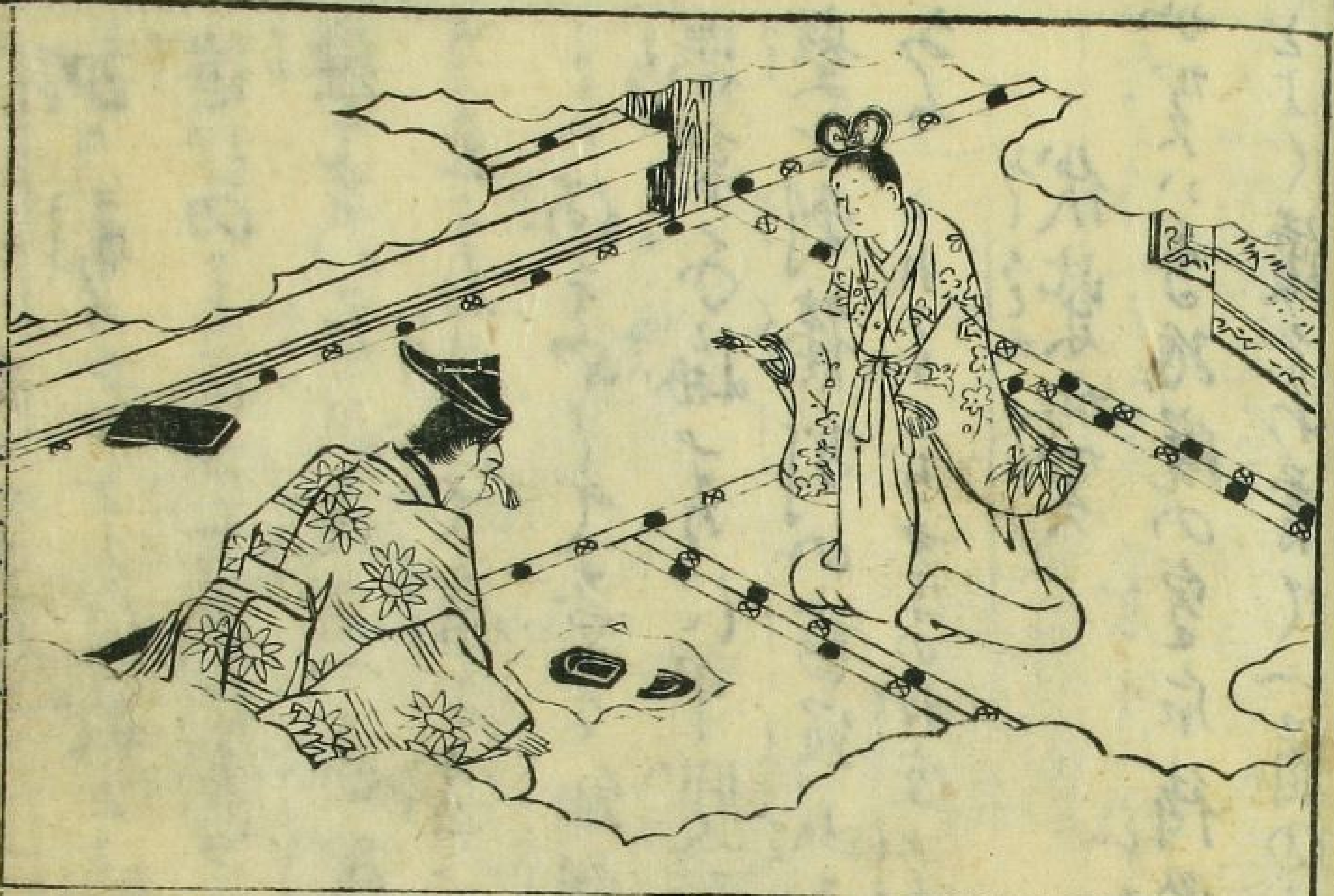
宿禰は孝元天皇の子孫なり景行成務仲哀
神功應神仁徳六代の朝に歴仕て大臣に任じて
天の政を執行ふ是日の本北大臣のはじめなり神功
皇后新羅を征しきひし時武内供奉つかふまつり
て三韓を討随へ皇后海朝ありて筑紫にありて



應神天皇を誕生ます時
八幡大神是なり此已紀
應神別稿の忍熊王
大和の国にて謀叛あり武
内みつから應神を抱きまつり
皇后と路をかへて東征し
遂に誅業をなして忍熊
王と同じく讐て應神の治
位定まれり仁徳の治世に
いたって武内薨せらる寿
三百十七歳なりわ

仲太

仲太ハ本院の左相時平の孫亜相時秋の家士なり時秋の家に硯あり秘蔵として常に出されし官爵に進毎に是出て玩弄せられけり仲太これを一たびらんしたくと願ひて時秋の留主をうかゞひ密に箱を披き錦乃袋を解て謹て見んとする折節人の跫のしけるを主君乃来り給ふと驚き狼狽て箱に納んとて誤て取落し硯を二つに砕けり仲太ハ罪を恐て終にせんと個[illegible]に時秋の思ひの外年十四歳なる仲太をよびて汝さ他で逃しむことなかれ家の宝なれども父の告なく深き罪もあらしと思ひしハ手をわくせで流を

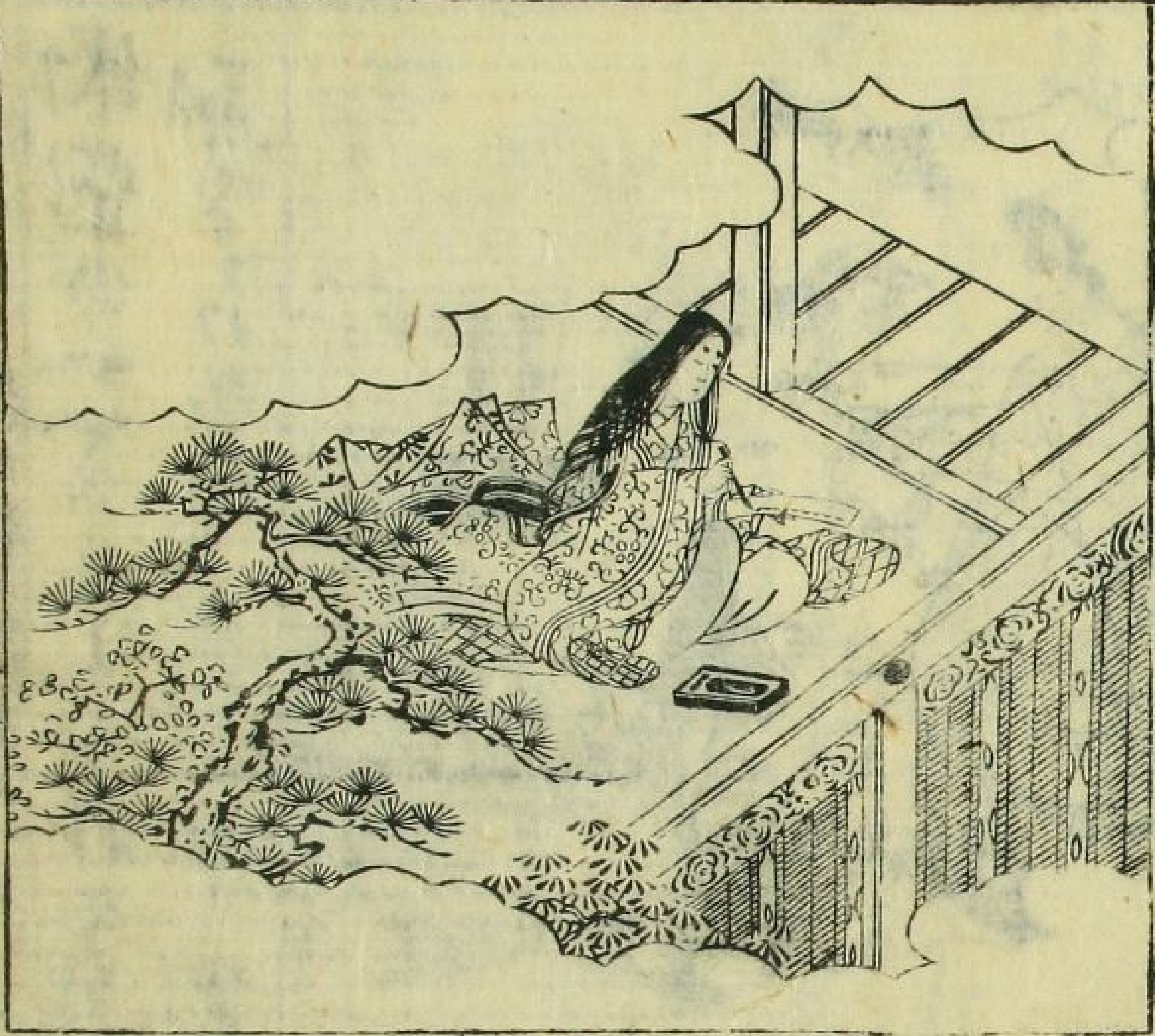


なりし喜びかくて時秋の家ふ論ハ硯の破却しけるを見んて其故を問ふる咄えかひしおとく自の身の不届なりとゆされけれバ時秋大に怒て此硯ハ皇祖継子の連住吉の祠に籠られける時明神託して給ふる也是地に投と止しより此家の寿秋を送るといへどもまさ如くの如く誠実にて

つくりまゐらせんとこれ故に此硯を寄せけり海の皮に
進むのことは日々是をつとむべしとの法語とひとしく
弟子乃左れ秋は一ッの硯わが家に傳りて寳とす
るよし傳へて家に遠へり今此れを破砕する
とは何ぞやとて竟に幼児の頭を割られ仲た
悲哀千悔すに甲斐なしこてにおいて俗を棄
髪を剃り播州の書寫山に菴を結びて籠りける
となり　これすなはち当寺の性空上人なりとぞ

伏柴加賀

加賀は鳥羽院の皇后待賢門院の官女なり和哥
とよく讀ければ一首の哥あり世に流る秀作なり



とおもひ述のすに此哥を給ふ縦のとわかれん時よみん
さらん一しかの堂おられと人まを称して待ちわびしに
花園の左大臣有仁公
に心ひかされて忍びつ
ちぎりし左大臣や疎く
なりてゆれぬやがてかの
歌を讀て送りたりけり
左大臣もあはれにおぼしく
られよりのちもなほ
とぞさて此哥は千載
集に入られて名を

伏柴のかゞとよばれたるかわ
兼てより思ひしことよふし柴のこるばかりなる歎きせんとは

待宵侍従

小侍従姓ハ紀氏武内宿祢の苗裔石清水別当光清が女なり近衛の皇后につかへて太后よく皇后の崩御の後徳大寺の實定卿に侍従と召て情好あつかりし夜しめやかに

かたらひて東雲ちかく成ければ実定おどろかさで帰らんとせられける時に侍従別れを惜むこゝろをよみてそれ情とよせける

待宵にふけゆく鐘の声きけばあかぬ別れの鳥はものかは

世の人感じて是より待宵の侍従とぞ称しける

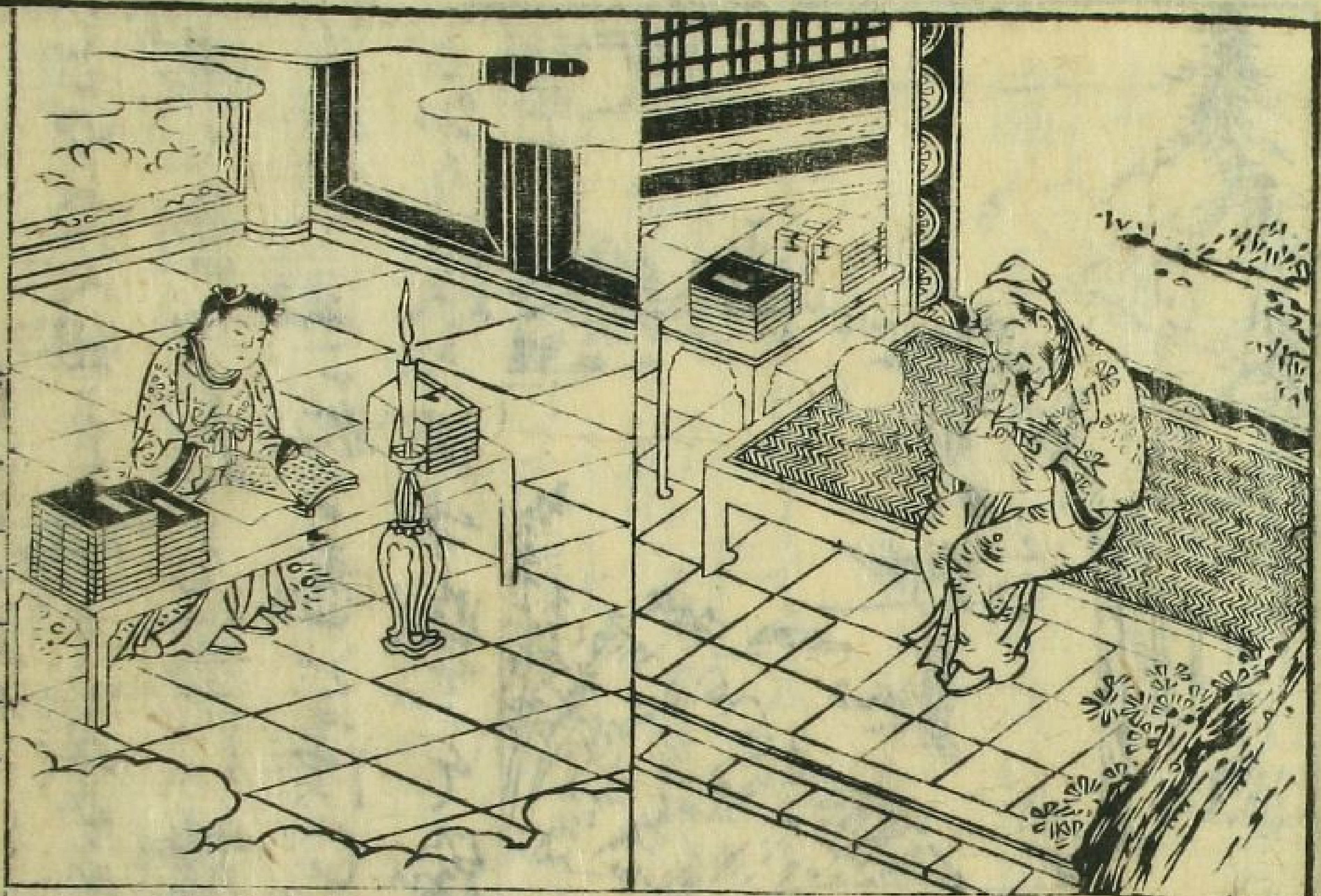
石花咲

石に花咲とハ有まじき喩なり強ても帰郷代酔に慈利縣の武口塞に石上に花咲かす推心の牡丹のごとし又蒸燎焼を畫に精しく

者といへどもよく及ことあたはず或ハ地を以てきなると
撃て破られど拂拭すれども元の花復見るといへり

照病鏡

天寶遺事に葉法善一ッの鐵鏡あり物を鑑ことあたかも水のごとし人つねに疾病あれバ鏡を以てこれを照らし臓腑の中に滞るところのものを見て後に藥をもつてこれを療に終に瘡瘵するといへり



司馬君實　續蒙求

司馬君實ハ温公と云ふ学文に志あつく圓木を用て枕とし此を警枕と名つきかし眠ることあれハ枕轉て忽覺ぬ即起て書を讀れけるとなり

祖瑩　續蒙求

祖瑩字ハ元珍范陽と云所の人なり八歳にて書一
耽り時の人呼て小聖童

とりて父母を幼して学ふ若き神と傷みんしを憐て禁止すれとも密に燈をかくし戸と閉窓とふさぎて通夜ふ書を読む年十二ふして中書学生となり後ふ秘書監とて翰林学士の官ふ成られ

匡衡　西京雑記

匡衡字ハ稚圭学文をつとめてすぐれとも貧窮ふして秋燭を照を得のちからなし故ふ壁を穿て月の光りあひハ隣家の灯乃影を書面ふ招受て

昼夜ふとゝまるとなし又其里ふ書物をお以く持る富人あり匡衡これをとんぽく欲して其家ふ傭人となりわらくはるのを願ふ主其志を感しく庫にある所の書を出して学文をせさせるつねふ業を長して大儒となれり

淳于髠　史記滑稽伝之巻

むかし齊王淳于髠といふ者を使ふて鵠を楚ふ入く楚国ふ送るに路ふして其鵠をにがしけり淳于髠ふづからたわて空き籠を持て楚王ふ見え告るハ此度齊王某を使として鵠をおくらせらる路の川ふいて水をうあり

鵠を送る事に思ひひさしくて鵠
より出し水など与ふるにまさに
また虚空に飛去りぬ詮
方なくて自殺せんとぞんじ
しかども禽獣によつて人
死すると伝へもおそらくは
君の名をいやしめんと死を
とゞまり候ぬ鵠は世に多
しといへどもこれを求めば君を
欺くなり又他国に亡げ
まんとすれども両国の同を

通するに由なし取詮なし礼義を奉て偽いはを
とし罪をまぬかれんと待のことなりといふ楚王感じて
大に悦び斉王は直臣ありと感じて酒肉をたまひ
財禄をあつくせられけり

魯般　淮南子

周の代の末に楚の王宋の国を攻んと欲す宋
の大夫墨翟此を伝聞て楚国に往王に向ひて曰
大王義を揚て宋を棄んとし給ふとも不義は天の憎む
所なれば必ず悔給ふべしといふ楚王のいはく我
は天下の巧匠なる雲梯の械を作らせて公輸がごとく雲
宋を攻んに曷ぞ勝ざらんと止る事なし墨

雲のかけはしとは今の井楼と同じ

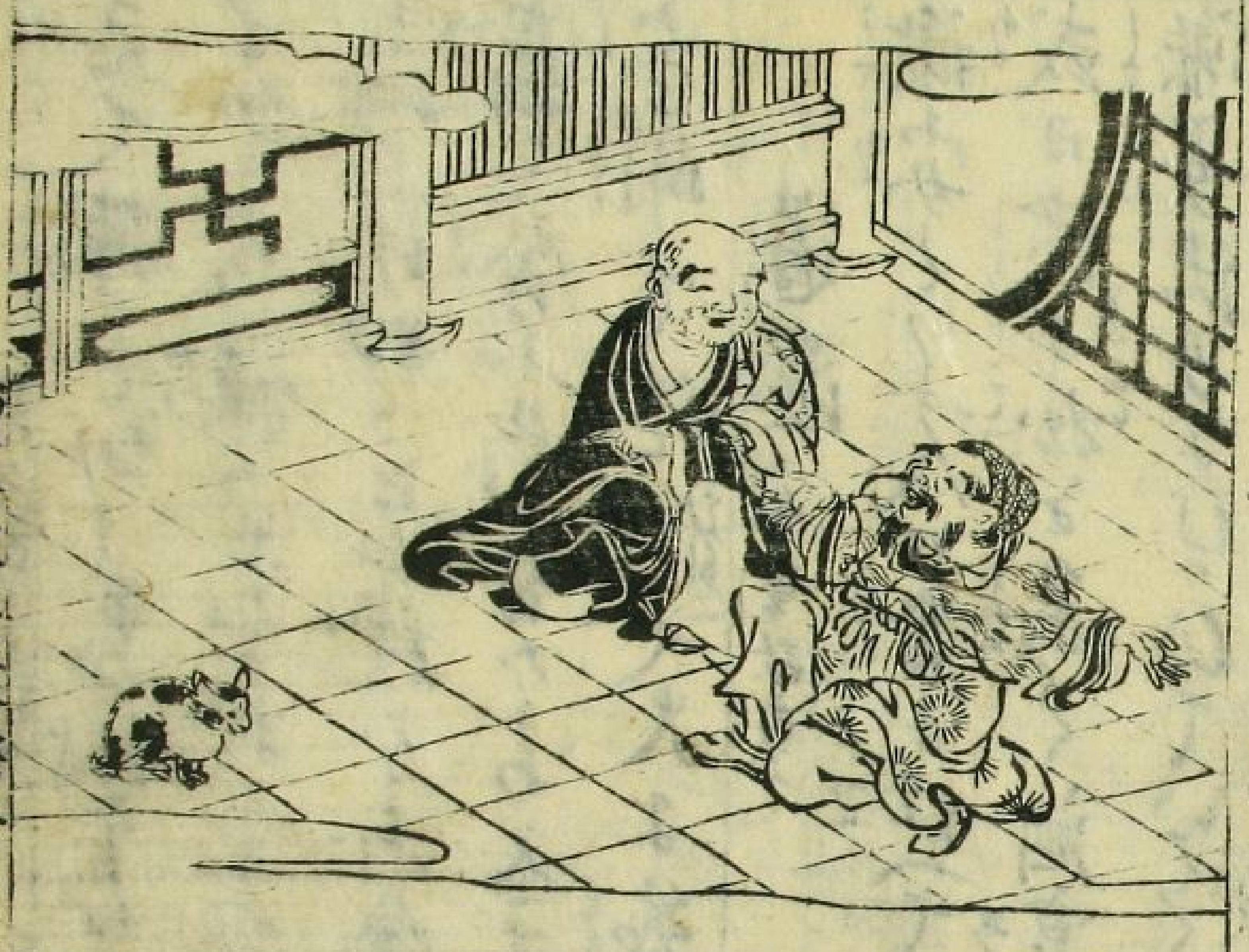
なし墨翟力なく拘らん君ハ魯般をして攻とりかけし
めるく魯ハ策を次てこれを防んといひく思ひかうまかハ
楚王雲梯を設て宋を攻らるれ墨翟徒さ〳〵して
堅く守り九たひ攻て九たひ追却き楚の軍勢遂ニ
宋ニ入ことあたはされ乃楚王兵器を偃て戦を止られける
○湖海新聞ニいはく趙舟城の南ニ石橋あり岩切
魯般の作る所なりといひ此橋すでニ成就すれば張神
といふ者驢ニ跨て橋をとをりて笑ていはく人此
橋を石堅く柱さかんなりといふ魯班なる時ハ震動すべ
しとてすて小橋ニ登りんとすれて撼動て傾りとし
魯般橋の下ニ行かれて両手を以つくかへ定て遂ニ

故のごとし今において橋上に張飛が通の四足の痕あり
橋下にハ曹操が兵営のつれとわかといへり

養由基 説苑

養由基ハ楚の材たかよく
射る楊の葉を去こと百歩
にして是を射に百たび発
て百たび中る楚の恭王
猟して猿を射まふに猿甚
矢を避てあさむかる王
是にて憂とよし恭王則
養由基に命じて此を射さしむ

る養由基を召て矢を矯いまだ発ざるに猿その枝
をはなれて樹を抱て哀號さけぶとなん



猫五徳 揮塵新譚

漢土乃萬壽寺に彬師
といふ僧ありよく戯言を
いふ或時客と對談しけるが
座の前に猫踞りけるを
彬師いはく人雖五徳
ありといふ五徳皆猫亦
これあり客その謂を問ふ
ばおもへくいはく猫鼠と

こんて捕ことなし是仁なり鼠来りて其食を奪へど
すなはち譲る是義なり客ありて饌を設るに
まづかけ出る是礼なり食物を蔵しおくには一もよく
窃て食ふ是智なり冬来れば竈に入る是信なりと
客聞て絶倒て大に笑ひしとぞ

道蘊　金壺故事

謝安といふ人は晋の代に仕へて大保として一族の大身なる
或日諸子姪を集めて酒宴を折節雪の降りける
謝安諸子にむかひていはく是何に似るぞと兄謝奕が子
朗といふもの答て塩を空中に撒もて見るべしと
いふ其妹道蘊は未柳絮の風によつて起る

やとりふあを差じといふ道蘊は女なれども才智抜群なれば誉られける東坡が詩に柳絮才高不道塩と作りし是

紙鳶　風俗通

紙鳶ハ凧箏ともいふ是韓信敵陣の遠近をはからんために作れりとなん

○續博物志にいはく今の紙鳶絲を引て上らしめ小兒口を張て望視せしめ内熱を洩さん為

昇月宮　開元遺事

唐の玄宗皇帝仲秋の夜月を翫ひ給ふ時羅公遠といふ仙術の者傍に侍て君月中に至りたく思召すやとて杖をとりて空中に擲られハ化して銀の橋となり明皇これに登り遂に大なる城

閑にいさゝか公遠いそくこれ月宮殿なりや仙女数
百人廣庭に舞遊ぶ明皇聞ていそく是何の曲ぞ
公遠いはく霓裳羽衣乃曲なりと

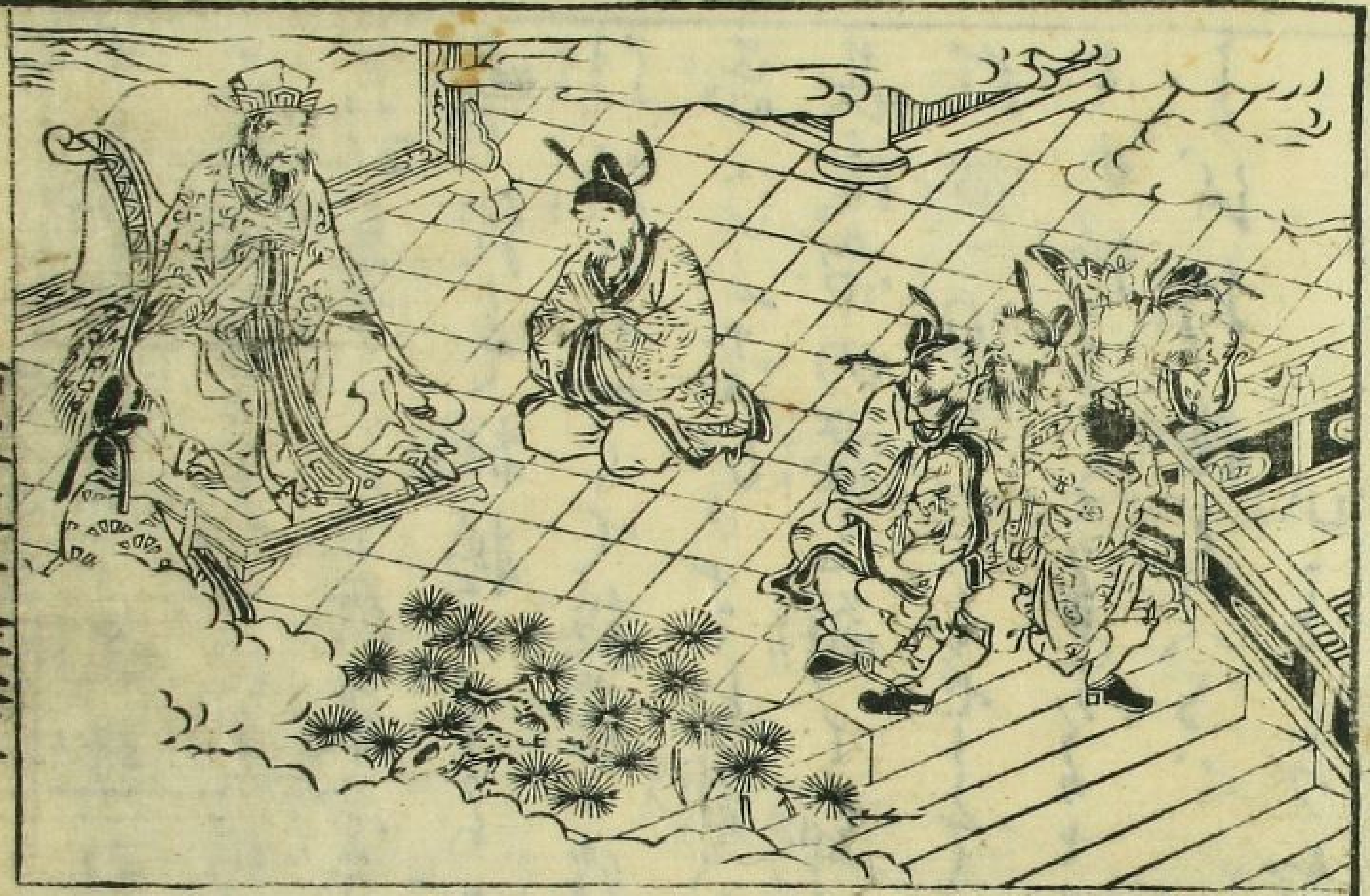
翟璜任坐　劉向新序

魏の文侯士大夫と座して我はいかやうなる君かと問
ければ皆人君ハ仁君なりと
申に独り云ハ翟璜をもつて君ハ中山を伐
弟を封ぜずして子を封ぜらるれバ仁君不
肖なりといふ文侯いかつて翟璜を逐出されける
次に任座といふ者来れり是ハ親直ついひけれ
君なれバ何とかこゝろざし候と問て面をとめ申者

任座の曰君ハ仁
君なりやんと
われきく君仁
なれバ其臣直なり
といへり今翟璜が
ことに直なるを
以て直臣と称す
ハ仁君の験なり
と申す文侯此
を善して翟
璜を上卿とし
給ふ

公孫穆　後漢書

公孫穆といふ者大学に遊びて書を読みけるが貧しく糧乏しく為方なくて呉祐といふ者の家に行き米を舂く賃をとりて身の資とぞなしける呉祐も書を好む者なりければ或時孫穆と学文の物語をするに傭者にハあらず大いに驚き是より念比に思ひて遂に杵舂の交はりを定しと定交於杵舂間といふや



朱雲　前漢書

前漢の代の朱雲字ハ游魯国の人なり勇力強盛にて節義を立んと志厚き人にも高尚なる者と感ぜられける或時成帝を諫めとて奏状を奉りて帝の師匠と崇めし張禹と云ふ者を何の役にも立ぬ者と退ぞけんやと諫しかバ帝いかりて頻に流さんとし

まゐられし帝逆鱗ありて下として上を犯す也
其罪ゆるすべきにあらずとて官人に命ありて朱雲を
引立下さんとすれば朱雲ハ猶いひやまず殿を下る
ゐじとて欄檻にすがりて争ひける程に遂に欄をれぬ
引はなさんとて殺害に逢へかしと左将軍辛慶
忌といふ者ひたすら歎き命をこひ請てさらに其罪
甚後帝の怒も解て却て直臣なりと感ぜられ也
程彼が力をあらはせしとて折たる欄檻を修復せず
その儘にてとゞめおかれ後世まで人を諫むる
しるしに折檻といへり此をもて諫るのたとへとせり

諸汾　小史

晋の代乃諸汾といふ人
田に出しれば虚空より
女乃乗る車下降る
車の内に美顔といふ女の
ありし婦人ありて諸
汾に向ていふやう自ハ
天女なり天帝の命に
よりて其方と夫婦の
かたらひをなさんために
来れりとて一夜をあかす

嫦娥と遊んで婦女飯に及ぶれハ天上に論ふへしと賭をまひ
又来年の此月此所にてまちて仰らんと約束して其後
別ともり浩洛ハ翌年の其月を待得て彼所にいたり
宿れハ嫦娥のことく天女又あまくだり男子を一人抱
て浩洛に授て曰これハ君と我との中にまうけたるか
子なりわれ此より後代々帝王と成へしといひをくりて
後天上に还り去けりつゐに此子代を興して帝王
の位にいたる北魏の元祖神元皇帝とハ是なり父ハ
即浩洛皇帝といふ時の人乃諺に浩洛皇帝ハ妻
なくとむこへて舅の家なし神元皇帝ハ母の親の家な
しといひつたへたり

七福神

世俗に蛭子大黒吉祥 辨才毘沙門布袋福禄寿を以て七福神と称すまた蛭子の尊ハ伊弉諾尊第三の御子なれハ三郎と称す（社に漁夫といふわり是と混雑する者ありといへり）（戎三郎といふハ非なり 按ずるに…の事）大黒天ハ大国主の命又大己貴命ならびに號を素盞烏尊の御子なり天下の民人及び畜獣乃さいなんにあらくれ病を療すれ方を定め給ふ神なり今世に祭する所乃色黒く全体象みて槌を把り嚢を擔ふもの八昔時最澄祈願によりて比叡山の穀堆の上に出現わりし形とや（最澄ハ伝教大師）（ひゑい山の地主日吉大明神ハおほなむちのみこと）吉祥天女ハ経にいちく此名號をとき功徳を八

よく一切の貧窮業障を除て大冨貴を饒かし
て財宝を得んと云ことを相端正ふして二ツの臂有
左ハ如意珠を持右ハ施無畏印なり辨才天女ハ別名
宇賀神王と云ふ佛説ニ此神王乃呪を誦称せバ
自一切の福因皆悉成就すと云ことを形天女のごとく
ふて頂上ニ宝冠ありて宝冠の中に白蛇ありつを其の
面老人のごとし八臂ありて左乃第一ハ宝珠第二ハ
宝鉾第三ハ輪宝第四ハ羂索右の第一ハ宝剣
第二ハ宝棒第三ハ下論第四ハ宝箭なり又
十五童子ありて神王乃左右ニ圍繞すと云
伊勢の宗社ニ宇賀祢わり祢代の系図に宇賀神ハ素盞烏尊の御子倉稲魂の神なり稲荷山の祢宜も倉稲魂の祢まて五こくをつかさどるの祢なり故ニ宇かとをのくる

をもつく経の宇賀乃祢王と称て混雑するを者　毘沙門又多門天といふつきの形
左乃臂ハ腰の邊て鉾を持く地をさし右の手ハ肘
を屈て佛塔を捧ぐ身に金甲を被足ニ女人の肩
をふまえ凡須弥山乃半ふ四天王あり東ハ持国南
ハ増長西ハ廣目北ハ多門なり天竺ニハ北を以て
上とんまち衆生ハ自然ニ化現するなりやつ四ニ器ニ
百味を盛香樹の下ニ行てハ身を薫し衣樹ニ
行てハ種々の衣裳とえて身にきかせ荘厳樹ニ
樹器樹菓樹ありて意ニ随て受用し人為の五
十年を一昼夜とし人為の一万八千年を一四年と
して五百年を保と云　布袋和尚ハ唐士明州

奉化縣といふ處の神僧なり自名を契此と稱
きはこき形腰腹と肥ふとりて常に杖を以て布袋
を荷ふ故に布袋師と號す肆市に入て小兒と
たはむれ遊び常に雪の上に卧とも身を沾されず
或ハ吉凶を示すに期に應して違ふことなし人
これを以て奇なりとすと云 彌勒と稱す又ハ大黒の摸像に似て笑をふくミ小兒を
愛するの謂なるべし 福禄壽ハ南極老人星なり此星あ
らはるゝ時ハ天下治安にして壽を主ると云々
宋の代に あ(ゐ)しの元祐年中に京に一人の老人あり身の
長三尺にして首長その半にあり日々に市に
出て吉凶を卜ひ錢をえてすなはち酒を呑事を

或ハ其首をたゝいて吾ハこれ壽を益す聖人
なりと言よわる人これを見て其形を圖して帝
に奏す帝旨ありて其老人を召て酒を給ての
しめ今年いくつぞと問のぞんはわすれ久しき
たゞしといひ終て其形を失ふ翌日大史帝に
奏して申さく近ごろ南極星の飛行さし光り虹
のごとくにて帝の座に連れりと見ると帝これに於
ゐてまさに壽星なりしと知りて繪をそへ
贊し世に傳て圖する所ハ此なりといへり 後世竺と畫
くわるに鹿及び鶴を添く禄康壽おかしきによるべし鶴の
刻とせり壽老人と云もおかしきすし那と号べかるを

早稲田大学図書館
011688990833